わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンス能力開発領域に関する研究
～テキストマイニング分析から～

○野地有子[1]、野崎章子[1]、望月由紀[1]、北池正[1]、溝部昌子[2]、菅田勝也[3]
[1]千葉大学大学院看護学研究科、[2]国際医療福祉大学福岡看護学部、
[3]藍野大学大学院看護学研究科

【目的および背景】

2015 年には 12 億人が国境を越えグローバル化が進み、2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて国際医療交流（外国人患者受入れ）は国家戦略プロジェクトに位置づけられた。医療通訳等が配置された拠点病院の整備等が進んでいるが、外国人患者の対応で困っている看護職の課題に直接結びつくものはまだ少ない。そこで、わが国の実態に基づいた看護職のカルチュラル・コンピテンス能力開発に必要な領域について検討した。

【方法】

全体調査は、日本語版カルチュラル・コンピテンス測定ツールの開発と実態調査として実施し、質問項目の中に「外国人患者の対応で困ったこと」への自由記載欄を追加し分析した。全国を対象とした病院の国際化に関する先行研究で、本調査に参加希望のあった 19 病院の全看護職員を対象とした。無記名の自記式アンケート（約 20 分）で、看護部に配布回収を依頼し、2 週間の留め置き後に個別のシールで封をした封筒にて回収した。実施期間は、平成 27 年 9 月～12 月であった。研究者の所属大学における倫理審査委員会の承認を得て実施した。分析には SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1 を用いた。

【結果および考察】

参加 19 病院での調査票配布数は 9,140 件、回収数は 7,592 件（回収率 83%）、有効回答数は 7,494 件（有効回答率 82%）であった。外国人患者を受け持ったときに困ったことの記載件数は、4,738 件（51.8%）であった。テキストマイニングを用いた、上位 10 位のコンセプトは、言語的コミュニケーションのバリアに関連することおよび文化の違いがあげられた。全体は 74 カテゴリーに分類され、能力開発として図 1 に示す 4 領域があげられ、能力開発の指針としての活用が示唆された。

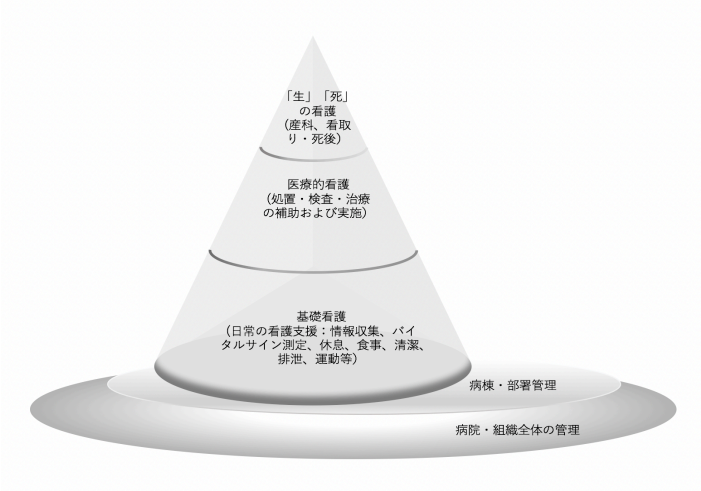

図 1. 看護職のカルチュラル・コンピテンスの能力開発領域（全国看護職調査結果より）

（本研究は文部科学省科学研究費助成事業基盤研究（A）25253107 の研究費助成を得て実施した）